もっとも「世路日記」も「花柳春話」という文学的先蹤をもっている。従って全く自己の内面にのみ真実であったとし難いかもしれないが、それはただそれを模倣し、翻案するに止ったものではなく、「花春柳話」のロマン性を十分に彼のものとすることができたところの、彼自身のものを見出すことができよう。そこに、当時多くの読者を動員することも可能であったとしなければならない。

以上のように「世路日記」における文学的主体性は、当時においては極めて貴重なものであり、そこにすでに近代的な文学性の足跡を認めうるものがあり、文学史上、逸することのできない作品であると思う。

（五九・八・八）

（注）この小論の結論における評価が、従来の評価と異なることを明かにするため、念のため、冒頭にあげた先学の言を抄出する。

本間久雄氏「明治文学史・上巻」二七九―二八二ページ。「……純粋の政治小説と稍々趣を異にするが、菊亭香水の「悲雨惨風世路日記」……をも序でに併せ述べて置かう。……その頃の教育社会の風紀が振はず弊竇しきりに生じ、且つ教育界に身を置く者として、志の遠大を期する者が極めて稀であるのを慨して「諷刺激励、頑を匡し、儒を起さん」ために、その作を公けにしたのであり、……政治小説といふよりは、寧ろ教育小説、立志小説といふべきものである。しかし、此作は……教育事業を、……男子一生の事業とするに足りないものと考へ……当時の政治熱が、いかに青年有為の教育者をして、其職に留らしめず、更に彼れを駆って、政治社会に赴かざるを得ざらしめたかといふ一代の風潮をも幷せ窺ひ得るものであり、その意味で、この作は一種の政治小説と云へないことはない。……」

篠田太郎氏「史的唯物論より観たる近代日本文学史」一〇四ページ。「これらの政治小説以外に一般文士の政治小説がある。……菊亭香水の「悲雨惨風世路日記」は政治小説とは云へないもので政治も政界も描かれてゐず……最後に主人公が志を国事に懐いて政界に活躍することを附け足してあることが政治に関係あるだけで、一種新様の小説と云ふにすぎない。……戯作の影響とは全く離れてゐると共に、文士の政治小説（政治家のそれには非ず）に形態上の先駆をなしてゐる点は認めらるべきであらう。……」

吉田精一氏「明治大正文学史」二二ページ。「花柳春話の影響は著しいものがあり、その模倣作……が続出したが、その内で挙げるべき佳作は菊亭香水の「世路日記」である。小学校の教員……が、志を立てて郷関を出で苦学力行するといふ、明治初期らしい主題を単純な筋立てでまとめたもので、作も構想も幼稚であるが、ただ全篇を通じて掬すべき情味があふれ、甘美な感傷が香気高く匂ってゐる。……」

「明治文化史・文芸篇」一一七ページ（岡崎正氏担当の部分）「……政治小説発展時代において、政党を超越して政治小説を書いた人もいる。菊亭香水はその一人で、その著「月水奇遇艶才春話」は教育の振興を説いたもので、一種の政治小説といえるであろう。これは一八八四年（明治十七年）に「悲雨惨風世路日記」と改題され、新文体と新思想の先駆的作品となり、三十年前後にかけて、文学青年の第一に愛読する書の一つとなったという。」

仮名草子瑣言

村田穆

この稿は、本年七月十三日本学の夏季講座で「『好色一代男』まで」と題して、しやべりました草稿です。そんな話相応の逸脱もあつて、平生の饒舌を更に甚だしくした嫌ひはありますが、文学の論文は、自然科学風の平板退屈な記述とは違ふ、といふ持論の遁辞にすがつて、稿を改める労を厭ひました。加へて、別稿の「『好色一代男』私記」（「立命館文学」昭和三十四年七八月合併号）と、この稿の性質上、重なる記述がありますことも、あらかじめ御見許しを願つておきます。

転換期の文学といふテーマの下で、私には中世から近世への変りめについて話せといふことなのですが、ここは実は、大変なところと思つてをります。それについては、今改めて申しますのも気のひけるくらゐ、年々の文学史の講義で繰り返してゐるところですが、この国の文学史を大きく分けて、前半貴族文学の時代後半庶民文学の時代と区分する、その境めがそこにあると思ふからです。

近ごろ、日本史の方では、鎌倉室町江戸の三時代を一括して中世と呼ぶ風があります。その封建時代といふ一括の仕方は、歴史学の方では当然で、むしろ、遅きに過ぎた感がありますが、それを文学史の方にもちこむ人のありますのは、いかがなものでせう。

文学史では、封建時代といふ概括に一義の意味があるかどうかの、反省が必要です。

仮りに、その時代の作者や作品を漫然と思ひ浮かべてみても、鎌倉室町時代なら、定家、兼好、世阿弥、心敬、宗祇等々の人々にしても、平家物語以下の軍記物の如きにも、私どもがすぐ強く感じるのは、封建制でなく、むしろ、貴族文学、その亜流、隠者文学のにほひぢやありませんか。江戸時代の作者についても、西鶴、芭蕉、近松から種彦、春水の徒に至るまで、数へ立てて、庶民文学の先駆、町人文学の感が深いぢやありませんか。一寸注意しておきますが、町人といふのは家持階級のことで、その下に借家人階級があるのです。やかましく言へば、享受者の層は時代の下るにつれて、借家人階級にも厚くなり、文字を必要としない芸能ははじめから借家人階級の参加も相当に見られますが、中心は、町人階級で、文学は、まだ完全に庶民のものとなつたとは言へぬのです。

さて、この一寸した注意の前にかへつて、鎌倉室町時代やら江戸

時代やらの作者や作品を漫然と思ひ浮かべて、つきあたるこの感じは、大切です。芸術の学問は、固定概念や形式論理よりも、ここのところを大事に育て上げねばなりません。

政治が文学に影響しないわけはありません。が、政治がすぐさま、人間生活のすべてを支配すると考へるのは、政治屋もしくはその走狗の、暴慢な思ひ上りに過ぎません。文学の政治との関はりあひの最も重要な点は、文学は政治に抵抗批判することなのです。政治屋は自分のイデオロギーを唯一無二のものと信じて、その政治形態を永久につづけようとするものです。文学者は、その政治屋の作る時流の中で、時流に流されないで、独りで物を考へることの出来る人、時流に抵抗し批判して、新しい次の時代の到来を培ふ人の謂ひです。言ひ換へれば、反俗精神といふことになるのですが、それは往々無意味なもしくは反動的な白眼者流と見られることも多いながら、さうでなくて、本当は、それこそ流行言葉の進歩的といひ得べき文学者の中核の精神なのです。政治屋に尾を振つたり時流に便乗したりするの徒は、意識するとしないとに拘らず、文学者とは厳に区別して、宣伝屋と言ふべきです。

かくて、政治と文学はずれがあるものなのですが、封建社会では、そのずれは最も甚だしいのです。武力は、もともと、反文化的なもので、武家は、階級としては、文化の上面の統制者であり得ても、文化の創造者とはなり得ぬからです。

政治史、経済史、文学史等々それぞれに関はりあひがないわけではありませんが、それぞれ自律の法則で発展するものなのです。

そんなわけで、私見では、日本文学史を区分して、奈良平安を貴族文学の時代（古代）、鎌倉室町を貴族文学亜流の時代、隠者文学の時代（中世）、江戸を庶民文学先駆の時代、町人文学の時代（近世）、明治以後を庶民文学の時代（近代）と、四時代に分つのです。

○

むろん、文学には、昨日と今日に明確な一線を引くわけにはゆかず、庶民文学の先駆は貴族文学の末流とからみあつてゐることは、言ふまでもありません。中世期の説話文学などには、庶民文学の胎動も確かに見られるところですし、近世末期にも、堂上和歌は、民間にまだ並々ならぬ敬意をうけもしたのです。

そのからみあひの中から、近世文学の出現を、物語の面に限つて解きほぐさうとするのが、私の今日の課題なのです。そのためには、中世期のお伽草子に一瞥をくれねばなりますまい。

お伽草子は、誰が誰をめあてに書いたものかと言ひますと、すつきり割り切れません。ひどく貴族風のものからひどく庶民的なものまで、雑然混然としてをります。が、貴族の絵巻物形式の中に、それまで地下を流れ歩いた泥臭い民俗が臆面もなく割り込んで来たことには間違ひないでせう。つまり、お伽草子は、庶民性を採り入れたところに、物語に新しい未来を開く端緒をつかんだのですが、その要素は、まだ物語を充実させるには至らず、ひたすらに衰弱に衰弱を重ねた物語といふ文学形式のあとを追つて、表現の文切型や構成の類型化が著しく、物語としては、過渡的現象として、最低の、といふより、物語ともいへぬほどの、衰弱したしろものでした。

近世初期の草子物語の類を総称した仮名草子は、形の上で、一応お伽草子を継ぐもののやうに、扱はれてゐます。とすれば、仮名草子に予想されるところは、近世になつて、社会が安定し、庶民の経済力が頓に豊かになり、その社会的地位が向上するにつれて、就中、印刷術の普及と相俟つて、お伽草子などとは較べものにならぬ庶民性の氾濫と、それがより雑駁なものを産み出しはしないかといふ恐れと、そこから清新な物語の生まれて来さうな期待などがあるのです。そこのところをどう分析して、近世らしい物語の発生発展を見つけるかといふことが問題なのです。

○

そこで、まづ、仮名草子の目ぼしいものを二三拾つてみませう。

「恨之介」は、活字本以来数種の版があり、仮名草子を説く人の誰もが取り上げる代表作の一つです。

この作一読、文切型の文辞に、単調浅薄な調子があつて、といふのは、お伽草子風で、うんざりさせられるのですが、それでも当時は盛行したのですから、相応のわけがありませう。

この調子は、お伽草子以来の、読んでもらつて聞く享受層の、ますます多くなつたせいでもありませう。内容の繰り返しの煩らはしさも、例へば、主人公の葛の恨之介が、清水の霊夢を蒙つたことを、文中に五度までも繰り返しますのは、最も甚だしい例とはいへ、文章の拙さといふよりは、聞く人を、而も、教養の低い聞き手大勢を予想したことを示すのぢやありませんか。

それにしても、この文切型の文辞こそ、文章といふものだつたことをはつきり知る方が、もつと重大です。型にはまつた表現以外に文章はないのです。といふことは、独自の物の見方、考へ方のないといふことなのです。貴族文学末流の形骸を僅かに伝へ承けることに満足した、その意識の低さ、端的に言つて、文芸精神の死滅が見られるのです。

次に、その梗概を述べませう。

「都にかくれなき、色ごのみの」五人男の一人に、葛の恨之介といふもの、慶長九年の夏の末、清水の万燈会に詣でて、一美女を見染め、後を慕つて、近衛殿の邸に入るのをつきとめます。手づるがなく、困じて、清水の霊験を求めて参籠し、四七日に霊夢を蒙り、はつとりの庄司が後家の尼を訪ねます。尼は、美女の素姓を、木村常陸の息女で今は近衛家に養はれた雪の前と明かします。恨之介は恋文を尼に托し、尼は雪の前の友のあやめの前に托して、雪の前にとどけます。

雪の前の返書中の、詩歌の恨之介には解き難くて、細川玄旨に仕へる宗庵といふものに尋ね、女の意中を知ります。後、中秋名月の夜、あやめの前の手引きで、二人は一夜の契りを結びます。けれど、再び逢ふ事を得ず、恨之介は思ひ死にし、その遺書を手にした雪の前は、悲んで頓死し、尼やあやめの前も後追ひ自殺し、恨之介雪の前を同じ所に葬るといふのです。

この物語が盛行しましたわけは、まづ、次の二点が考へられます。

一つは、何時の世にも幼い読者にひどく魅力ある悲恋といふテーマ、もう一つは、その主人公が、貴族の男女でなくて、悲恋にもせよ、身分高い女と庶民の男が恋し得たといふところに、庶民読者の事大根性を十二分に満足させたこと、この二点です。

それにしても、貴族風に対する庶民の劣等感、即ち、この作者の庶民に対する軽蔑感は大変なものでした。恨之介が雪の前の返書を

解し得ず、宗庵に説明してもらうや、「か程の事を知ずして、雲の上人を恋参らせし事の恥しさよと、我身に指ざしをして、ばうじやくぶ人のわうわくものゝ徒らと、独言し」ますし、唯一度の逢ふ瀬も、恨之介からは手出ししかね、雪の前がきつかけを作るので、「かく御情のなかりせば、むなしくよはをあかさなんと、あぶなき今夜のたはふれなり」と、感涙にむせぶのです。今の目からは、まこと情けなく味けない恨之介の劣等意識でした。いや、今もこれ以上の劣等意識を、米国やソ連に抱くやからのあるのが、もつと情けないのです。

お伽草子の作二十三篇、うち一篇「猫の草紙」は近世の作ですが、それを、御伽草子又は御伽文庫と名づけて、近世全期を通じて版行されてゐますその冒頭の「文正さうし」は、「正月吉書の次に、冊子の読初とて、女子は文正草紙を読しとなり。」と、種彦は書いてゐます。鹿島の大宮司の雑色の文正は、塩売りから産をなし、二人の娘は、二位の中将の北の方と、帝の女御となる夢のやうな話です。この話を、町人の娘が読初めしたといふところには、「恨之介」流の劣等意識の根深さがうかがへませう。

それはさておき、「恨之介」の盛行には、右の表向きの二点の他に、実は、それ以上のものがあつたのです。

私は、まことしやかな梗概を述べましたが、その筋立ては、全文のほんの一端に過ぎぬのです。読んでみられるなら、往々筋のゆくゑを失念するほど、夾雑物が多いのです。

夾雑物のめぼしいところを、ざつと拾つてみませうか。

まづ、恨之介の雪の前を見初めるところ、女の美しさを、お伽草子風の文切型の言葉で長々と形容し、描写ではありません、唐天竺日本の美人の名を数多くあげ、美しさの比較ではありません、次に、女のもつ三尾線を細叙し、殊に、筒の蒔絵の名所尽しを一々あげたり、恨之介が清水に祈らうとしては、清水寺の由来から御利生の例、更には釈尊の話に及んだり、尼が雪の前の素姓を語るに、関白秀義と秀次とのいざこざから、秀次の死、就中、その三十三人の妾達の三条河原に於ける処刑の詳細にわたつたり、二人の恋文の故事古歌の羅列だつたのをはじめて、事毎に故事古歌を引くのです。

この夾雑物の目にあまる煩らはしさは、作者の知識をひけらかすといふよりも、知識の供給がめあてだつたことに、よると思ふのです。お伽草子に較べて、遙かに広く低い享受層の拡がりが、これほどの知識の供給を必要としたのです。

「恨之介」に、物語を作らうとする意識がまるでないといふのではありません。が、結句は、衰弱した物語性に加へて、知識供給の過剰意識が、この物語を、似而非物語にしかなし得なかつたのです。

○

もう一例、仮名草子の最も出来のよい例とされ勝ちの、「浮世物語」をあげませう。

この物語の注目された第一は、冒頭の著名な「浮世といふ事」の一条で、そこから、全体が現世謳歌の精神に貫かれてゐるかの如き評価が与へられ勝ちでしたが、それを全体の精神とすることの不当さは、松田君の「『浮世物語』の挫折」（「国語国文」昭和三十二年五月号所載）で指摘した通りです。

第二に、この物語は、例へば、水谷不倒氏の「列伝体小説史」

（昭和四年七月刊）の解説でも借りますなら、「（前略）浮世房といふ当世人の生活を描写したから『浮世物語』である。浮世房とはうきにういたる剽軽な坊さんで、はじめの名は瓢大郎といひ、親譲りの資産のあるにまかせ、若い時は放蕩を尽し、傾城狂ひから、博奕の仲間入り、身の置所なくして、一時歩若党となつたが、程なく喧嘩して牢人となり、後剃髪して浮世房と名乗り、鳩の戒、薬師となり、又侏儒となつて、さる大名に仕へ、滑稽に托して君を諫め、果ては仙術を得んと工夫を凝らしたが、天仙飛仙は今の人の学ぶべからざることを悟り、我は蛻仙となるべしとて、

今はわが心ぞ空にかへりけるのこるかたちは蟬のぬけがら

の一首を遺して、行方知れず失せたといふ。」とあります。大方の解説は皆この流です。この解説を読みますなら、一寸「好色一代男」でも思はせるやうな、ちやんとした筋立てがあるかのやうですが、それはほんの一部、これも、「恨之介」同様、雑多な知識の供給が主でした。故潁原退蔵先生の「常識的な立場から一般に処生の道を説いた」（潁原先生「仮名草子」—前記松田君の論文より孫引き）と言ひ、近藤忠義氏の「啓蒙的な役割を果す為の百科事彙的な著作だつた」（近藤氏「近世小説」昭和十三年十月刊）と言はれる通りです。

この物語の主人公浮世房の、いささか滑稽譚をくりひろげますのは、「竹斎」だとか「東海道名所記」だとかが、滑稽な人物をからませて、名所案内記を面白くしようとしたのと、同じやり方なのです。或ひは、談義僧が因果応報の理を示すために怪奇談を以てしたのと、同じやり方なのです。

第三に、近頃は、この物語に、ほの見える反抗的口吻をとらへて、反封建意識を見る学者もあるやうですが、そのきつかけは、前掲近藤氏の論の「社会に対する反抗者的批判も見られる」といふあたりから、はじまるかと思はれますけれど、思ひ過ごしのやうです。

なるほど、武士に対する批判もあります。が、それは、身のほどを知れ、足ることを知れ、天道を恐れよ、それが結句身のためになるといふ主想を、武家にも及ぼしてゐるだけで、反武家、反封建の思想ではないやうです。といふより、武家のことにも触れ得るところに、庶民読者に対する著者の優越感があらはれてゐると思ひます。

君主を言ふ眼目は、「諸国の大守、みな国民をいたはり、百姓をめぐみ給へり、たとへば人あり、飢にのぞみてわが股をそぎて食す、腹には飽たれども、足のたをるゝがごとし、国のあるじは腹のごとく、百姓は足のごとし、腹のみふくれても、足たゝずしてはそのかひなし、君大にさかへ給ふとも、百姓をとろへかしげたらば、国をおさむるしるしなからん」といつたところで、臣としては、「ましてや一日も片時も、大恩をあたへ給ふ主君の御事、かりそめにも、そしりたてまつる事大なるあやまちなり、そしらんよりは隙を申て、そのもとを立のくべし、隙をあたへられずば、こゝろをつくして奉公忠節をつとむべし、それにも主君の心にかなはずば、天命よはしとしるべし、をのれをかへりみて過を思ひなば、世をも人をもうらむ事あるまじ、しからばながくわざはひをとをざかり、安楽活計の身たるべし、よく此事を思ひはかるべし」と教へます。支配者を主にした卑屈な封建根性の典型的なものでせう。浪人生活を喰ひつめて、真宗の談義僧に転じたこの人の人柄が、鮮やかにうかがへま

せう。

○

例は、不本意ながら、このくらゐにとどめて、仮名草子の規定にかかりたく思ひます。

仮名草子を、どこでどう限定するかは、説のあるところながら、一応、故穎原退蔵先生の「仮名草子」（岩波講座日本文学昭和八年一月刊）まで遡るのが、常のやうです。

先生は、寛文の書籍目録の「和書幷仮名類」「舞幷草紙」といふところから、仮名草子を限定する手がかりを得ようとなさつたのですが、なるほど、日本古典全集の「書目集上」（昭和六年十一月刊）所収の「寛文書籍目録」ではさう見えますが、未刊文芸資料の「寛文十年書籍目録」（昭和二十八年五月刊）によりますと、前者の「舞幷草紙」は「舞本幷草紙」と承けますが、前者の「和書幷仮名類」は、「仮名和書」と承ける外、こちらで項目のふへた分の「仮名仏書」「暦書」「女書」「謡本」「筭書」「盤上書」「茶湯書幷華書」「躾方書幷料理書」「名所尽紀行寺社縁起」「名画尽」「狂歌集幷咄本」を大方含むやうです。つまり、穎原先生の使はれた目録は、粗筭なので、今となつては、「寛文十年書籍目録」の方を使つた方が、論を立てやすいと思ふのです。

それによりますと、「仮名和書」は小書きして「五常書」「孝行書」「心学書」「教訓書」とありますが、これと、「舞本幷草紙」の中の前代の作即ち舞の本やお伽草子を除いたものとを目安に、考へたらよいのぢやないかと思ひます。

これに、次の如き書物を加へてよいでせう。「仮名仏書」は、小書きして、「諸宗法語」「因縁物語」「儒仏論」とありますが、鈴木正三の「因果物語」「二人比丘尼」等をはじめ、「因縁物語」を中心に拾へますし、「軍書」も、古いもの硬いものに交つて、「信長記」「太閤記」以下、新しい当世向きのものがありますし、「女書」にも、女訓、女諸礼、女式目などの、実用そのものの書の外に、「本朝女鑑」「賢女物語」の如く趣向を巧んだものもありますし、「名所尽」の中からも、「東海道名所記」や「京童」等を拾はぬわけにはゆきますまいし、「咄本」に至つては、「醒睡笑」「伽婢子」をはじめ、すべてを、採つてよいでせう。

と、こんな大まかなことを言ひますと、厳密にはどの本とどの本との間に境めをつけるのかと、開き直られても、困りますが、書物は分類にあはせて書かれたものではないので、きつちり区別は出来ないと、一時逃れを言つて、次の項にゆづりませう。

○

仮名草子は、第一に、近世初期に町人を目当てに出版された書物と、規定出来ませう。

が、これには異説があります。暉峻康隆博士は「仮名草子」（岩波講座日本文学史第七巻昭和三十三年七月刊）で、寛永から明暦頃にかけては武士の啓蒙が目ざされ、寛文以降急激に町人を対象として膨脹した。と、説かれます。これも一見識です。

しかし、例へば、「犬枕」が近衛信尹の御伽衆の合作の草稿を秦宗巴が編輯したものとしても、「尤之双紙」が智忠親王のお伽の料として斎藤徳元の書いたものとしても、「醒睡笑」が京都所司代板倉重宗のために安楽庵策伝の口演を筆録したものだつたにしても、

それらが整版出版されたのは、町人目当てだつたと思ふのです。

もとは誰をめあてに書かれたものにもせよ、武士や貴族も読んだにもせよ、利に敏い民間の書肆が版にした以上は、民間にもいけると考へてのことだつたと思ふのです。そこに、仮名草子を限定したいと思ふのです。いささか形式論めく嫌ひはありますが、民間書肆の出版の対象となるかならぬかに、第一の目安をおきたいのです。

もつとも、町人といふ階級は、前代からの商人階級もありますが、戦国から近世初期にかけて、士農のここに流れこんだものも多く、武家的な仮名草子の自然のはけ口もなくはなかつたのです。

が、それは一端で、概括すれば、むしろ他の目当てで書かれたものが町人に流されたところに、自分の文化教養と名づけてよいほどのものをもたなかつたこの階級の乏しさと、そのゆゑに適不適など考へる余裕もなく旧文化教養にとびついた愚かさ、即ち、仮名草子の乱雑さが見られると思はれるのです。

有名過ぎる一齣ですが、西鶴の「日本永代蔵」巻一の三「浪風静に神通丸」に「惣じて大坂の手前よろしき人代〻つゞきしにはあらず。大かたは吉蔵三助がなりあがり。銀持になり。其時をえて詩哥鞠楊弓。琴笛皷香会茶の湯も。おのづからに覚えてよき人付会むかしの片言もうさりぬ。蒐角に人はならはせ。」とある猿真似式が、近世初期町人の文化教養といふものなのです。その猿真似式にいい気になつては、おのづから商ひの道を失して没落をきたすこともあり勝ちで、近松の「大経師昔暦」のおさんの父岐阜屋道順などは、その例です。

さて、次に、仮名草子の性格ですが、その一は、右に言ひ及んだところに関連します。雑駁性です。

先きにも、恨之介の雪の前に対する劣等意識を言ひましたが、もともと、文化水準の至つて低かつた新興町人は、経済力の急激な発展に伴ふ社会的地位の向上に、自分の文化がついて行かず、旧文化を財力で手当り次第に購ひ得るといふことを、文化人になることだと浅薄に考へたのです。この浅薄な事大根性と、それに伴ふ、雑駁性が、まづ、仮名草子の性格に挙げられるのです。

次に、町人の実利的な本性が反映して、実用性が、その重大な性格となります。

「恨之介」や「浮世物語」などの、仮名草子ではすぐれた方の作も、物語めいたみせかけながら、実用性のより濃いところのあることは、先きにも述べました。

実用性は、町人の潜在意識にはまことに強いものがあるのです。料理の教科書を「料理物語」と名づけて、奇異に思はぬのは、物語意識の幼さももとより、実用意識の根強さを思はねばなりますまい。「浮世物語」も、同様に、常識の教科書と、意識してゐたのでせう。

だから、仮名草子を当時の町人の意識で解しますなら、極端な実用書まで含めてよいのでせう。そこに、仮名草子の物語意識の低さと物語性の極度の衰へが見られます。が、文学の徒が、仮名草子を規定する際には、必ずしも当時の意識に合はせる必要もありますまい。そこで、私は、実用そのものか、多少の趣向をほどこしてあるかを目安に、仮名草子を規定しようと考へるのです。「料理物語」は実用書に、「浮世物語」は仮名草子に区別しようとするのです。

具体作では、境めの多少曖昧になるのはやむを得ません。

町人の浅薄な事大根性と実用的な欲求の上に立つ、雑駁さが、仮名草子の基本の性格です。従つて、仮名草子は物語風のみてくれをとつても、大ていは、似而非物語の域にしかとどまつてゐないのです。

○

仮名草子の右の性格が克服されるためには、町人が旧文化教養を一応手に入れて、そんなものにおびやかされないほどの成長を遂げ、真に自分の間尺に合つたものを求めるやうになること、それと共に、実用性以外に、物語そのものの面白さに対する欲求をもつやうになること、それには、或期間が必要だと思ふのです。

ところで、この謂はば物語不毛の時期に、物語の生れるきつかけをなしたのが、先掲の「咄本」の中に含まれた諸書、就中、外国文学の翻訳翻案です。これが、実用性以外の、物語の面白みを最も強く教へたと思ふのです。

私が、仮名草子を似而非物語に過ぎぬときめつけて、大ていは、と含みを残したのは、そこを考へてのことでした。

浅井了意の「伽婢子」は、確かに、本物の物語として珍重出来る最上のものなのです。今、詳しく内容に触れる余裕はありませんが、この物語の意味あひは、簡略にでも、述べておかねばなりません。

先掲「寛永十年書籍目録」中の「仮名仏書」は、仏法の有難さを教へる啓蒙書なのでせうが、就中「因縁物語」は、怪奇談で彩つて、仏法を俚耳に入りやすくしたところがあります。

浄土真宗は、庶民の吸収に最も力を注いだ宗派で、その談義僧であつた了意に、その方面の著書のないはずもありますまい。

この目録の右の条を見ますと、了意作とあるものに「破吉利支丹伝破却論」（三冊）「法華利益物語」（十二冊）「三井寺物語」（三冊）「かつらき物語」（三冊）があります。中で、「法華利益物語」が、怪奇談を含むにほひが濃いのですが、原本は知れぬさうです（北条秀雄氏「浅井了意」昭和十九年六月刊参照）。

少くとも、了意がさうした意味で、怪奇談に興味を寄せてゐたことは、「伽婢子」の自序にうかがへます。「況や仏理には三世因果の理ををしへて。四生流転の業をいましめ。或は神通或は変化の品〳〵を説給へり。」といひ、「三教をの〳〵霊理奇特怪異感応のむなしからざることををしへて。其道にいらしむる媒とす。」といひます。

ただ、この書の目的として、「学智ある人の目をよろこばしめ。耳をすゝぐためにせす。只児女の聞をおとろかし。をのつから心をあらため、正道におもむくひとつの補とせむと也」といふ一齣は、まにうけるわけにはゆきますまい。

怪奇談によつて仏理を説かうとする仮名草子の常道に、了意の意の動かなかつたわけではありますまいが、その意は口吻だけにとどまり、その意をはみ出して、物語の面白さに了意の魅かれたのが、「伽婢子」でした。

原拠の「剪燈新話」の面白さに魅かれ、それをこの国の風土に移し植えることに専心し、仮名草子本来の実用性を忘れ去つたところに、「伽婢子」の物語性の獲得があつたのです。

同じ人の作ながら、「浮世物語」は庶民性を意識して物語性を失

ひ、「伽婢子」は庶民性を意識から外したところに、物語性を獲得したのです。

つまり、この時期は、庶民的であるといふことは、その事大根性と実用性に奉仕することになり、物語性を充実させることは、さうした庶民性とは結びつき難かつたのです。

庶民性と物語性とは背反するといふのではありません。焦点が一つに合ひ難かつただけなのです。

天和貞享といふ時期を大事に考へますのは、一般の風かと思ひますが、私が大事がるのは、庶民性と文芸性の焦点が合つて来る時期をそこに見るからなのです。西鶴や芭蕉や近松が、そろつてこの時期に本当の仕事をしはじめたのは、理由のあることなのです。

そこで、もう述べるまでもないことですが、この仮名草子の似而非物語性を克服して、近世庶民の物語を創り出したのが、天和二年の「好色一代男」といふわけなのです。

「好色一代男」の出現については、立命館文学の今度の号に書きましたので、あはせて、御批判頂くと幸甚です。

（昭和三十四年祇園会宵山の日）